

# 地域を元気に！ 愛着ときずなが タネを育てる

地域住民やまちづくり団体の人ら約150人が参加して2月6日、総合福祉センターで開かれた「古ツーリズムシンポジウム」の基調講演やパネルディスカッションからまちづくりを考える。

「地域が元気になるタネを一つでももって帰ってください」。

2月6日、総合福祉センターで開かれた「吉備野・古ツーリズムシンポジウム」(NPO法人吉備野工房ちみち主催)は、この言葉から始まり、参加者はタネとは何かを考えた。

別府温泉の冬を代表するイベント「クリスマスマスHANAABIファンタジア」や「別府温泉八湯温泉博覧会」を手掛けたNPO法人ハットウオンパクの鶴田浩一郎代表理事。「地域の活性の手法として、みちくさ小道に求めるものは？」と題した基調講演で、取り組んだ事例を紹介しながら、「地域を語れること」「民間の発案」「人材のネットワーク」の3つが地域再生のキーワードだと話す。「まちを歩



まちづくりを考えようと開かれた「吉備野・古ツーリズムシンポジウム」。満員の会場からパネラーの示す考え方への質問が出るなど、参加者はまちづくりの手法や行政との協働のあり方などについて考えた



■久米マップ  
久米地区の住民とNPO法人吉備野工房ちみちが協働で制作。イラストを多く使い、同地区の良いところやお勧めの場所をまとめている。散策にも使え、折りたたむと封筒にもなる。1000部発行

ムを企画した。地域資源をつなぎ合わせて形にしたり、市民と行政の間に立って課題を解決したりする「中間支援組織」としての活動だ。鶴田さんは、「地域のつなぎ役やアドバイザー機能などもつ中間支援組織の成熟が、地域を元気にするタネの一つ」とした。

株式会社イータウンの斉藤保代表取締役、基調講演をした鶴田さん、ちみちの加藤せい子代表(奥坂)の4人。まちづくりに必要な環境や中間支援組織などについて意見交換した。

地域づくり団体にとって、「ネットワークのぶ厚さが成功の条件」と鶴田さんは話した。横浜でコミュニティカフェを運営する斉藤さんは、「地域の人材育成にコストをかけることは行政は苦手」と指摘。「すそ野を広げ、核となる人材がまち

づくりには必要」と説いた。協働によるまちづくりについて市長は、「行政が何でもひっかぶらない。市民といっしょにやっていくことが大切だ」と。そして、「協働の場を多く設定していきたいし、突破力をもち柔軟に対応できる職員の育成も必要」と熱く訴えた。



吉備野工房ちみちの事務所で「みちくさ小道」の説明を受けるフィリピンの研修団

## 「みちくさ小道」の 手法を知りたい

### フィリピン共和国の町長や行政官が視察

まちの活性化に必要なことを学ぼうと来日したフィリピン共和国の研修団が1月15日・16日の両日、総社市を訪ね、まちづくりの手法を学んだ。

「地方自治クラスター活性化セミナー」と呼ばれる研修で1月6日から21日まで来日し、総社には2日間滞在した。研修団は、内務自治省の地方事務所長のノバル・ペドロ・ジュニア・アノバ団長をはじめ、町長や行政官ら14人。15日は、市役所で市とNPO法人との関わり方や多文化共生の取り組みを視察した。

16日には、NPO法人吉備野工房ちみちの事務所で研修団は、同法人が手がけている体験交流プログラム「みちくさ小道」の事例や、特産品のパッケージデザイン提案などの取り組みについて説明を受けた。スライドを使って行われる説明に、団員は熱心にメモを取りながら耳を傾けていた。

団長は、「学んだことを、私たちの地域に見合った形に変え、まちの活性化に生かしたい。ちみちの手法は、フレンドリーで、まちにある資源を上手に生かしている。私たちもその手法には違和感を感じない」と、研修の感想を伝えてくれた。